

令和 5 年 5 月 17 日現在

機関番号：14101

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2022

課題番号：20K12961

研究課題名（和文）20世紀アフリカ系アメリカ文学におけるエンパシーの表象戦略

研究課題名（英文）The Strategies of Representation of Empathy in the 20th century African-American Literature

研究代表者

田畠 健太郎 (Tabata, Kentaro)

三重大学・人文学部・准教授

研究者番号：10837305

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：最新のエンパシー理論を参照しながら、アフリカ系アメリカ人作家の嚆矢であるリチャード・ライトによる代表作『アメリカの息子』におけるエンパシーの描かれ方を、主に物語理論的な観点とより合わせながら、批判的に吟味した。共感を感じたり感情移入しながら小説を読むことは、読者や登場人物が人種的・政治的・文化的な他者に近づくために必要不可欠な心理的回路である一方で、その共感や感情移入は決して完遂することはできず、しかし完遂できないからこそ他者を他者として尊重しつつその他者に魅了され続けることができるという複雑な態度を要請することを、当該作品の丹念な精読によって明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

小説作品の読書における共感的・感情移入の態度の肯定的効果は、文学というジャンルの凋落の今日的状況に抵抗するためのよすがとして、無批判に喧伝されることが多いが、本研究が批判的に明らかにした成果は、その肯定的効果を一概に否定するものではないが、共感的・感情移入的読書の危うさと魅力を同時に捉えるものであり、その意義をより精緻に検討したことで、読書という行為の基盤にかかわる知見への貢献として役に立つ。

研究成果の概要（英文）：Referring to the newly developed theories on empathy, along with some narratological insights, my research critically examined how Richard Wright's Native Son--a masterpiece by one of the first professional African-American novelists--strategically foregrounds various kinds of empathy in the story. My rigorous close-reading of the novel shows that empathy serves as a necessary first step for a reader or a fictional character to be faced with racial, political, or cultural others, and that, since the goal of the empathetic approach cannot be fully achieved, empathy requires that one take a complicated attitude in which one pays due respect to the other while getting attracted to him or her with all the more fascination because of the imperfection inhered in the empathic approach.

研究分野：American Literature

キーワード：エンパシー アフリカ系アメリカ文学

1. 研究開始当初の背景

エンパシーは感情に関わる現象であり、感情というものの学術的扱いづらさや、感情的要素を非理性的で女性的だと軽視するような知の男性中心主義的傾向もあり、これまで文学研究では正面から考察されることはなかった。国内外問わず学术界全般においても同様に近年までエンパシーは研究対象として扱われることは殆どなかった。しかし20世紀末に「ミラー・ニューロン」が発見されると同時多発的に様々な分野でエンパシーへの注目が高まり、結果、今日では心理学、神経科学、哲学、倫理学、社会学、教育学など領域横断的に研究されている。比較すると現在の文学研究での関心はまだ萌芽的なものに過ぎない。しかし、エンパシーは読書の楽しみの一つであり誘因でもあるという点で文学的経験の基盤であるという面もあり、文学研究は他分野の成果を取り入れつつも独自の視点を示すことが必要であった。

ただ、文学におけるエンパシー研究は、本研究開始当初は、美学や物語論の観点からの形式論的研究が大部分を占めていた。一方で、エンパシーは他者理解に関わる方法であり、多民族国家であるアメリカにおいては政治的に問題化されてきており、人種・民族系文学では特にそれが顕著である。その意味で20世紀アフリカ系アメリカ人小説という本研究課題の対象設定は文学のエンパシーを政治戦略として問い直す先駆的なものになるとして着手された。また方法論的には、文学分野におけるエンパシー研究は未だ黎明期にあり、研究開始当初の時点では学際的エンパシー理論研究の成果が十分に取り入れられていなかった。加えて、文学読書の基盤的な経験でもあるエンパシーを批判的に吟味し、「エンパシーとは何か？」というような根源的な問いに取り組むことは、我々21世紀の読者と文学作品との新たな関わり方を吟味するという点で、本研究は我々の読書体験に新たな見方を与え、文学研究だけでなく文学読書そのものの意義が問われる昨今、文学分野の活性化にもつながることを視野に入れ着手された。

2. 研究の目的

本研究は、「エンパシーとは何か?」「虚構の登場人物に感情移入するとはどういうことか?」というような、素朴だが文学的経験の基盤をなす共感や感情移入に関わる問いを、20世紀の代表的アフリカ系アメリカ人小説家の創作に関わる政治的文脈において問い、情緒的な側面から批判・再評価することで、エンパシーという感情行為を分析するための方法論を構築し、文学的なエンパシーに関する議論が広く開かれうる基盤を創出することを目的としている。

3. 研究の方法

エンパシーの最新の学際的理解を具体的なテキスト分析に活かす文学研究の新手法を確立するために、本研究課題では、アフリカ系アメリカ人作家の嚆矢であるリチャード・ライトによる代表作『アメリカの息子』におけるエンパシーの描かれ方を、最新の学際的エンパシー理論の知見を主に既存の物語論的な観点とより合わせながら、批判的に吟味した。

4. 研究成果

コロナ禍における行動制限によって、研究開始当初の目論見であった、同時代のエンパシー言説(テキストとして記録されている分析対象作品出版当時におけるエンパシーについての直接的・間接的証言)を採集して分析に組み込むという、米国での資料調査を必要とする部分の研究はあきらめざるを得なかった。その代替案として、最新のエンパシー理論をつまびらかに参照しながら、図書だけで遂行できるエンパシー概念の理論的な洗練へと研究手法の方向転換を余儀なくされた。その成果は、エンパシー理論と文学読書の効用を自らの政治哲学に組み込んで、現代アメリカを代表する哲学者マーサ・C・ヌスバウムのエンパシー理論の検討を中心に組み組んだ。その成果は、三重大学英語研究会発行の *Philologia* 5 2号(2021年3月)に「小説のエンパシー理論 II Martha C. Nussbaum のエンパシー理論の検討」(pp.31-57)として論文化した。

また、研究当初の計画では、20世紀のアフリカ系アメリカ人作家たちの作品群におけるエンパシーの表象を系譜学的に捉えることを目的としていたが、その嚆矢であるリチャード・ライトによる代表作『アメリカの息子』におけるエンパシーの描かれ方を詳細に検討するうちに、この作品自体が持つエンパシー表象戦略の精緻さと複雑さに気づくこととなり、系譜学的で概論的な総説よりも、本研究課題の本来の目的である、文学的なエンパシーに関する議論が広く開かれうる基盤を創出するためには、そしてまた、エンパシーという感情行為を分析するための方法論を構築するためには、具体的な作品の精緻な分析をとおしてそれをありありと提示することが優先されるべきだと判断から、研究対象をライトの『アメリカの息子』ひとつに絞り、つまびらかに分析する方向に転換した。

具体的な作品分析としては、エンパシーの分析を主に物語論的な観点とより合わせながら、当該作品を批判的に吟味した。作品内のエンパシーの表象を分析する中で見えてきたのは、共感を感じたり感情移入しながら小説を読むことは、読者や登場人物が人種的・政治的・文化的な他者に近づくために必要不可欠な心理的回路である一方で、その共感や感情移入は決して完遂することはできず、しかし完遂できないからこそ他者を他者として尊重しつつその他者に魅了さ

れ続けることができるという複雑な態度を要請するということである。この知見は、文学というジャンルの凋落の今日的状況に抵抗するためのよすがとして小説読書におけるエンパシーの肯定的効果が無批判に喧伝されることが多い現状に対して、エンパシー的読書の危うさと魅力を同時に捉えるものであり、その意義をより精緻に検討したと言え、本研究課題の目的にかかわる、読書という行為の基盤にかかわる理解の深化として貢献したと言える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 田畠健太郎 | 4. 巻 53 |
| 2. 論文標題 リチャード・ライト『アメリカの息子』再読(Ⅰ) 『アメリカの息子』におけるエンパシーの検討 | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 Philologia | 6. 最初と最後の頁 21-40 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 田畠健太郎 | 4. 巻 52 |
| 2. 論文標題 小説のエンパシー理論II Martha C. Nussbaumのエンパシー理論の検討 | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 Philologia | 6. 最初と最後の頁 31-57 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|--|--------------------|
| 1. 著者名 田畠健太郎 | 4. 巻 54 |
| 2. 論文標題 リチャード・ライト『アメリカの息子』再読(Ⅱ) 『アメリカの息子』におけるエンパシーの検討 | 5. 発行年 2023年 |
| 3. 雑誌名 Philologia | 6. 最初と最後の頁 1-29 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|---------------------------|-----------------------|----|
|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|